

東京新聞は、15日の朝刊に「祖国よ 非戦の句を聴け」と題して、ロシア人、ベラルーシ人、ウクライナ人の俳句愛好者の句（各国語の英訳から和訳したもの）を掲載している。ロシアのウクライナ侵攻は3ヶ月を過ぎても収まらず、激しくなるばかりで、戦禍報道を聞くたびに心が痛む。21世紀において、あり得ない武力による侵略が起こってしまった。ミサイルと砲弾が行き交う中で、多くのウクライナ人が殺され、戦争の意味を解し得ないロシアの若い兵士たちが空しく戦死している。そして、この戦争のために、世界中の経済が行き詰まり、多くの人々が物価高騰に苦しんでいる。人間は何と愚かなのかと気が滅入る。

ロシア西部に住む56歳の男性・俳号「ゴシャル」さんは、ロシア国内で戦意を煽る「偽善」と「狂乱」への憤りから一時、ロシアの隣国に家族と共に移った。そこで、寒さに耐えつつスモモの花が咲くのを見た。激しい戦禍の中を生き抜くウクライナの人々の姿が花と重なり、3行詩を詠んだ。「今年なお李（もも）咲きぬべし空爆下」ゴシャルさんはロシアに戻ったが、「プーチン政権の戦争犯罪には、絶望しかない」、そして、反戦運動は厳しく取り締まられ、違反者は罰せられ、「反戦を訴える手立ては、もう俳句しかない」と覚悟していると言う。同じく、ロシア西部に住む62歳の女性・俳号「ターニャ・リヒト」さんは、日々死の谷を歩むことを強いられているウクライナ人の苦しみに思いを寄せて詠んだ。「崖が縁歩みつ今日も雹（ロケット）降る」「グラート」は「雹」という言葉で、ロシア軍のロケット発射機の名称になっている。ターニャさんは、政治のことは話したくないが、「民間人と双方の兵士たちの死の痛みを思うと、全ての戦争に反対。この思いに政治的な背景はない」と言う。ベラルーシ中部に住む56歳の男性・俳号「フィルモル・プレース」さんは、ロケットが着弾した後、防空壕を出ると、黒い蝶が不気味に舞うように煙が舞い上がっている情景を詠んだ。「砲撃（たま）止みて黒蝶のけぶり伸掛（のしか）かる」プーチン大統領の盟友ルカシェンコ大統領が強権支配するベラルーシも反戦の言動は取り締まられている。「戦争が始まり、俳句で明るいこと、楽しいことを詠めなくなってしまった。早く争いが終わってほしい」と願っていると言う。ウクライナの首都キーウの郊外に住む30歳の女性のアンナ・ビアズミティノバさんは、爆撃音が響くバルコニーで見つけた春の日を浴びる蠅の様子を、ウクライナ語で詠んだ。「爆撃の遠音（とおね）に温（ぬく）む縁の春蠅（はえ）」蠅もロシア軍機も空から飛んで来る厄介な存在だが、蠅は命を、ロシア軍機は死を思わせる。爆撃音を聞き、蠅の羽音に耳を傾けていると「生活と文明が壊れていく。何てはかないんだろうと、悲しくなった」と言う。ウクライナ西部の都市リビウに住む54歳のオリガ・チェルニフさんは、ロシア軍の攻撃で亡くなった家族を市街地に掘った仮の穴に埋葬しなければならなかった人々の辛さに思いを巡らして、ロシア語とウクライナ語で詠んだ。「花壇（はな）ありし辺（あた）りに爆死の子を埋（うず）む」戦争前は多くのロシア人の友人がいたが、その殆どがロシアの軍事行動を支持したため、関係を断った。それでも、ロシア語で俳句を作るのは、「いつか私の句を見た時に、自国の過ちに気付いてもらうため」と力を込め、「戦争はいつか終わる。ウクライナがまた幸せに包まれる時が、きっと来る」と続けたと言う

戦争は人殺しを公然と認め、しかも、多く殺すことを強要する、最も非人間的なことである。また、戦争を遂行するためには、国は言論を厳しく統制する。言葉の自由を奪われないように、国を監視することが反戦の始めである。